木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2013 秋
Vol.88
平成25年

地域の歴史
豊かな森林と水に育まれた木曽谷南部の大桑村

地域の治水・利水施設
木曽川の電源開発と大桑村の発電所

歴史記録　宝暦の河川施設　第二編
宝暦治水によりつくられた猿尾（二）

研究資料　長島輪中の郷 館長　諸戸 靖
奥の細道と式年遷宮

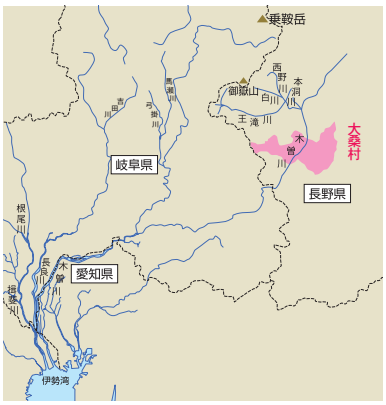
豊かな森林と水に育まれた木曽谷南部の大桑村

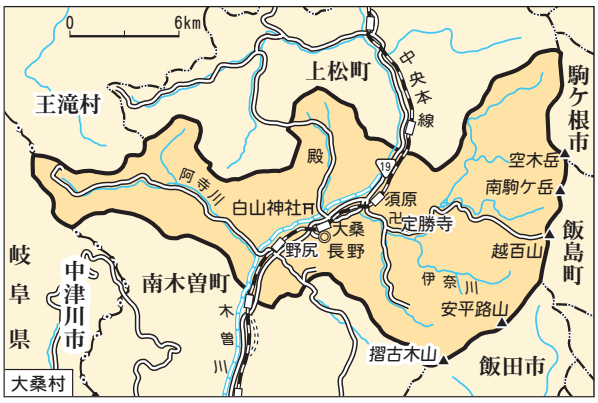
長野県木曽郡大桑村は、木曽谷の南部に位置する山村です。中世には木曽の政治・文化の中心地であり、近世は中山道の須原宿・野尻宿が置かれ賑わいました。大正一二年に村を襲った土石流災害は、砂防の必要とともに後世に伝えるべき大災害でした。

河岸段丘上の集落（殿地先）

木曽谷南部の山間地・大桑村

長野県の南西部にあたる木曽郡大桑村は、木曽谷の南部に位置し、東方を南駒ケ岳（二八三七m）・空木岳（二八六四m）など南アルプスの山々が連なり、南は長野県南木曽町、北は上松町、西は王滝村および岐阜県中津川市に隣接しています。村の中央を木曽川が南北に貫流しており、東から伊奈川、西から阿寺川・小川などの支流が合流し、これら河川がつくった僅かな河岸段丘上に集落が点在しています。主要な交通機関として木曽川に沿ってJR中央本線と国道一九号が走っています。





原始時代の遺跡は、長野県全県的な特徴である縄文時代中期の遺跡が多く、弥生時代以降の遺跡はほとんど見られません。見つかっている遺跡は、先土器時代一ヶ所、縄文時代三六ヶ所、弥生時代一ヶ所で、特に注目される遺跡としては、先土器時代の石器が出土したのぞきど遺跡や、県下で三点だけ出土した御物石器が見つかった新床遺跡、縄文晩期の人骨を伴う配石遺構が見られた大明神遺跡があります。

古墳時代から奈良時代の遺跡は見つかっていませんが、「続日本紀」の大宝二（七〇二）年の条に岐蘇山道、和銅六（七一三）年の条に吉蘇路を通したとの記録が見られます。平安時代に入ると「三代実録」に元慶三（八七九）年、木曽は美濃国絵上郷に属し、吉蘇・小吉蘇の二村（里）があると記されています。二村がどこにあったかは諸説あって明確ではありませんが、小吉蘇の中心は当村の和村・殿村あたりが有力とされています。

殿村の白山神社

一二世紀後半の源平合戦における木曽義仲挙兵については、当村にも多くの伝承が残っていますが、遺構など確認されたものはありません。

中世木曽の中心地

中世の木曽には、大吉祖庄と小木曽庄があり、小木曽庄の一部は当村内であったようです。小木曽庄の地頭は常陸国真壁郷の豪族真壁氏が任命されており、真壁氏が崇拝した鹿島神社が須原・野尻に存在することなどからその本拠は当村内にあったと推察されます。

一方、木曽の北部には藤原氏を名乗る勢力が現れ、次第に力をつけて南下し小木曽庄を圧迫、一五世紀には真壁氏を排除して木曽のほぼ全域を支配するようになりました。藤原氏はやがて木曽義仲の子孫を自称して木曽姓を名乗るようになりました。

木曽氏は数代に渡って殿村を居住地にしたと伝承され、元弘四

須原宿定勝寺

野尻宿

（一三三四）年藤原光友建立の棟札を残す殿村の白山神社や、正長元（一四二八）年の棟札には藤原氏の名が記された野尻白山神社があります。また、永享二（一四三〇）年創建の定勝寺は木曽親豊によるものとされ、文明一六（一四八四）年には木曽家盛が定勝寺に一三仏を寄進しています。中世後半木曽氏が本拠を福島に移すまでは、当村が中世木曽の政治・文化の中心でした。

江戸時代の村と中山道

中世末期の争乱を経て徳川家康が江戸幕府を開くと、木曽は尾張藩領となり、豊かな森林資源と材木を運ぶ木曽川が併せて統治されました。

江戸時代の当村内は信濃国筑摩郡に属し、須原・長野・殿・野尻の四ヶ村がありました。この内、野尻と須原には中山道の宿場が置かれました。野尻宿は六九次の四〇番目の宿場で、宿場通りの長さでは木曽一一宿中奈良井宿に次ぐ長さで、「七曲り」と呼ばれ町筋が曲がりくねっているのが特徴でした。天保一四（一八四三）年の『中山道宿村大概帳』によれば、野尻宿の宿内家数は一〇八軒、うち本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠一九軒で宿内人口は九八五人でした。

須原宿は中山道六九次の三九番目の宿場町で、『中山道宿村大概帳』には、宿内家数は一〇四軒、うち本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠二四軒で宿内人口は四七八人と記されています。須原宿は最初は現在の位置より下流の川岸にあり、元禄五（一六九二）年の「高木伊勢守様御通ニ付福島へ宿々ヨリ書上書」に見られる「須原宿入口江戸より寅の方、町長五町拾六間四尺」と記載されているのは現在の場所ではありません。須原宿は正徳五（一七一五）年六月一八日の洪水でほとんどが流失し、同一二月に現在の場所へ引移しの願が提出され、尾張藩の援助を受けて享保二（一七一七）年に移転を完了しています。

須原宿　本陣跡

この二宿の中間にある長野村は合の宿といって、立場茶屋があり、駄賃馬荷物の交換所となっていました。

大桑村の誕生と大正一二年の大災害

明治七（一八七四）年、政府の要請により須原・長野・殿・野尻の四ヶ村が合併して「大桑村」が誕生しました。村名の由来については、四ヶ村合併の大集落であり、生糸が輸出品として将来有望な産業であるため、良い桑を多く作り養蚕を盛んにしようとの思いから名付けられました。実際、養蚕業の振興は目覚しく、多少の浮き沈みはあったものの、昭和前期までは村の主要産業となっています。

江戸時代からの主要産業である林業は、明治三四（一九〇一）年阿寺に郡下初の人夫食糧運搬鉄道が開通、明治四四（一九一一）年には中央本線が全通し川下げ運搬が廃止され、大正七（一九一八）年に森林鉄道野尻線が起工されました。戦前の木材増産政策や、戦後の復興に伴なう住宅建設ラッシュ、伊勢湾台風による風倒木払い下げなどで活況を呈していました。その後は、安価な外材輸入による価格の低迷や天然木の枯渇などにより製材業は衰退し、木材加工品の製造にシフトしていきました。

森林鉄道野尻線の鉄橋

大桑村の歴史において避けて通れないのが大正一二（一九二三）年の大災害です。七月一〇日ごろから降り始めた雨は、梅雨末期の集中豪雨となって村全域を襲いました。一七日夕刻からその激しさは増し、バケツの水をぶちまけた様な大雨となり、一八日未明についに土石流が発生、大きな被害が出ました。特に長野・伊奈川・須原・小川地区では死傷者が出る惨状となり、大桑村内で死者・行方不明者は七八名、負傷者三四名、被害家屋数二五九戸、被害のあった田畑・宅地は二六四八坪を数えました。中央本線は橋梁の流失・埋没が六ヶ所、築堤崩壊四ヶ所など三〇ヶ所に及ぶ被害を受け、約一八kmが不通となる開通以来の被害を受けました。復旧には、応急対策として周辺町村から人的な応援を得たり、全国から金銭支援を受けました。道路・橋梁などの工事費用は県が最大限の支出をし、村の負担を軽減しました。さらにその後一〇年余に亘って県営砂防工事が巨費を投入して施工されました。

水害記念碑

■参考文献
『大桑村史上・下』大桑村　昭和六三年
『長野県の地名』昭和五四年　平凡社
『日本地名大辞典・長野県』平成二年　角川書店

木曽川の電源開発と大桑村の発電所

水力発電の最適地であった木曽川は、明治末期より開発が始まり、現在までに多くの発電所が建設されてきました。大桑村でも一九二一年竣工の大桑発電所を皮切りに次々と建設が続き、直近では、河川維持水量を利用した大桑野尻発電所が運転を開始しました。

木曽川の電源開発

日本で最初の営業用水力発電は、明治二五（一八九二）年に京都南禅寺近くの琵琶湖からの疎水を利用して作られた京都蹴上（けあげ）発電所です。その後、全国各地に水力発電所が建設されましたが、送電技術が未熟であったため、発電所近くに点灯するに留まっていました。長野県では明治三〇（一八九七）年頃から大正三（一九一四）年頃までこうした小規模発電所の建設が行なわれ、木曽では明治四二（一九〇九）年六月に福島の杭の原に出力五〇kwの発電所が初めてできました。

遠距離送電技術は、明治三三（一九〇〇）年竣工の広島水力発電所で一〇、〇〇〇vの電圧により送電に成功しており、社会的には日露戦争による石炭価格の高騰などがあって、政府は明治四三（一九一〇）年から全国各河川の水力調査を実施して、水力発電の開発を奨励しました。

比較的降水量が多く流域に広大な森林を抱える木曽川は、急流で谷が深く、地盤が固い花崗岩で川幅が狭いので、ダム・発電所建設に適した立地条件を備えていました。加えて中央本線が明治四四（一九一一）年に開通しており、建設資材の搬入も容易であることなどから電源開発の最適地として注目されました。

なお、本格的な開発に先んじて、明治四二（一九〇九）年竣工の八百津発電所が木曽川における最初の大規模発電所として着工されています。

水利権と木曽川運材

木曽川の電源開発を中心となって推進したのは、後に電力王と称された福沢桃助（福沢諭吉の女婿（じょせい））でした。福沢は持論である「一河川一会社主義（一水系の開発・帰属を一社に委ね総合的な水力開発に資する）」を木曽川で実現するため、地元町村より水利権を譲り受けるため精力的に活動しました。町村との交渉は、安易に水利権を手放すべきではないとの意見やそれぞれの町村の思惑もあって難航しましたが、順次契約がなされていきました。

水利権とあわせて難題となったのは、江戸時代より続く木材流送への対処でした。木曽山中（当時は御料林）で伐採された木材は、支流に落とされ木曽川を下って名古屋市や伊勢方面まで運材されており、これを妨げる取水堰やダムの建設は許可されませんでした。福沢は自ら運材問題の解決に奔走し、当時御料林を所管していた帝室林野局との間で「木材搬出の森林鉄道を敷設する」ことを条件に解決が図られました。

大桑村の発電施設

木材運送の問題が解決すると、大正八（一九一九）年竣工の賤母（しずも）発電所（中津川市山口）を皮切りに木曽川の電源開発は急速に進みました。

賤母発電所に続いて大桑村野尻の大桑発電所が大正一〇（一九二一）年に運転を開始しました。須原の下河原地区に堰堤を築き、その右岸の取水口から取り込んだ水をトンネルによって野尻まで水平に近い勾配で導水し、落差を利用して発電する水路式発電所で、発電量は一二、〇〇〇kwと当時とし

大桑発電所

須原発電所

ては大規模な施設でした。発電機はアメリカ製のウェスチングハウスという新型のもので、その頃の日本では大型の発電機は生産できませんでした。工事はもっぱら人力で行なわれ、トンネルを掘るのもノミで岩に穴を開け発破をかけて砕き土石は人力で運び出していました。

引き続き大正一一（一九二二）年には、大桑発電所と同様の方法で須原発電所を造り、運用を開始しました。取水口は上郷木村地区に設置されましたが、昭和初期の水害により流失してしまい、現在はより上流の桃山発電所から直接トンネルで送水しています。発電所建設は以降も続き、大正一三（一九二四）年に田光（たこう）発電所、昭和四（一九二九）年橋場発電所、昭和一三（一九三八）年相之沢発電所、戦後になってからは昭和四三（一九六八）年に木曽発電所、昭和五二（一九七七）年に伊奈川発電所、昭和六一（一九八六）年に伊奈川第二発電所が建設されました。このうち、木曽発電所はダム水路式発電所で一一六、〇〇〇kwの出力をもっており、木曽川水系では最大の発電所となっています。伊奈川第二発電所が運転を開始したことにより、木曽川水系での発電量は合計一、〇〇〇、〇〇〇kwを越えました。

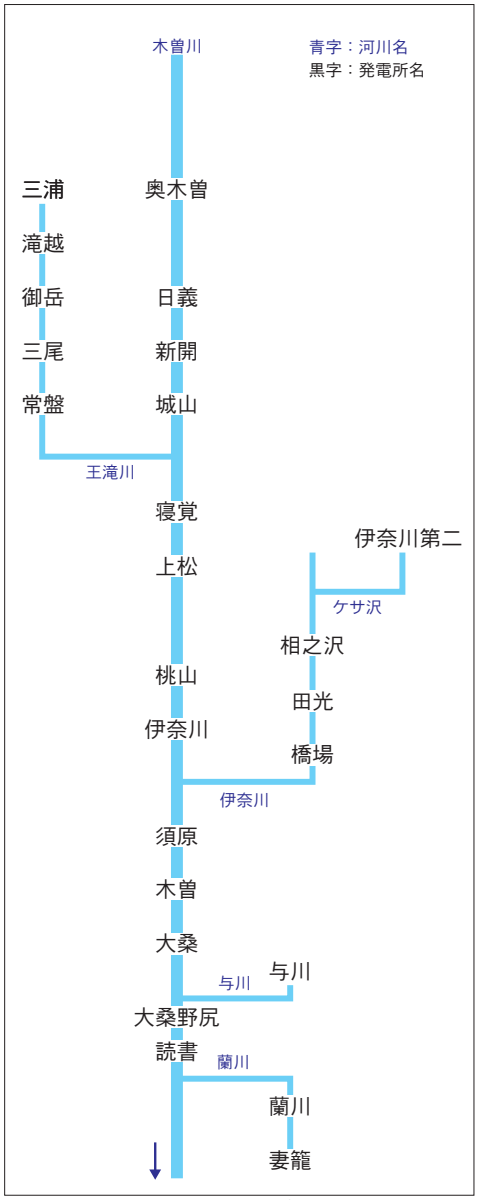
木曽川の発電施設では、より多くの発電量を確保するため、平成四（一九九二）年から老朽化した設備を更新する際、より効率の良い水車を採用する工事を実施しました。全改修後の合計出力は一、〇四七、四六〇kwとなりました。

大桑野尻発電所の建設

現在のエネルギーに関する課題として、CO2排出による地球温暖化が全世界的に問題となっており、化石燃料を燃やす火力発電に代わる再生可能エネルギー（新エネルギー）の開発が注目されています。風力や太陽光発電など様々な取り組みがなされていますが、もともと水力発電も再生可能エネルギーのひとつで、特に自然に負担をかけない（ダムの建造などを伴わない）小水力発電（一、〇〇〇kw以下）が新エネルギーに数えられています。

この小水力発電のひとつに、既存のダムから放水される河川維持流量を利用したダム式発電があります。河川維持流量とは、「下流河川の自然環境、水利使用および漁業等に支障を与えないよう必要な流量を優先して放流」している水のことで、これまで発電に使われてこなかった水力を無駄なく活用することになります。

平成二三（二〇一一）年六月に運転を開始した大桑野尻発電所は、大桑村野尻の読書（よみかき）ダムに設置された河川維持流量発電所で、この方式としては全国的にも早い時期の運転開始でした。発電量は四九〇kwの小規模な発電施設ですが、ここ数年こうした施設の建設・運用が全国の電力会社や地方自治体によって進められています。



木曽川の発電所（長野県）

大桑村内の発電所

発電所	運　転　開　始	認可最大出力（現在）
大　桑	大正 10 年 3 月	12,600 k w
須　原	大正 11 年 5 月	10,800 k w
田　光	大正 13 年 12 月	2,500 k w
橋　場	昭和 4 年 2 月	1,900 k w
相之沢	昭和 13 年 3 月	6,200 k w
木　曽	昭和 43 年 1 月	116,000 k w
伊奈川	昭和 52 年 11 月	40,700 k w
伊奈川２	昭和 61 年 5 月	21,600 k w
大桑野尻	平成 23 年 6 月	490 k w

読書ダムと大桑野尻発電所の水圧管路

■参考文献
『大桑村史上・下』大桑村　昭和六三年

宝暦治水 第二編

宝暦治水によりつくられた猿尾（二）

前号（KISSOVol. 87）で祖父江に残存している杭出猿尾について、猿尾は出水時にしばしば破損し、そのつど修築・改築がなされてきており、祖父江に残存する杭出猿尾も宝暦時の構造をそのまま維持しているとは考え難いと述べ、天保期前後での猿尾形状の変化について紹介しました。

本号では、猿尾形状が大きく変化した例として、木曽川右岸に残存している手斧猿尾を取り上げ、祖父江の杭出猿尾の天保期前後に限らずその構造・形状を変えている可能性を示唆した後、祖父江の杭出猿尾の測量結果について紹介します。

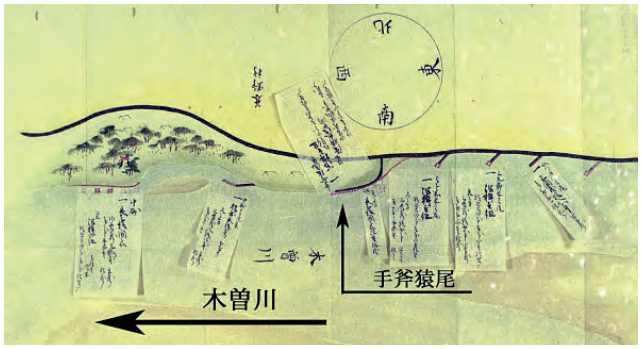


図-1　弘化２(1845)年の手斧猿尾(『木曽川通国役普請絵図』、岐阜歴史資料館蔵)

一・手斧猿尾の形状

羽島郡笠松町米野の米野東交差点信号傍から延びる手斧猿尾は寛文二（一六六二）年に造られたと伝わり、初代加納藩主奥平信昌の正室で家康の長女である亀姫に因み、「亀姫猿尾」とも呼ばれています。しかし、奥平は慶長一九（一六一五）年に、亀姫は寛永二（一六二五）年に亡くなっており、手斧猿尾の建造年と亀姫の在世期間とは一致しません。

図－1は米野村の弘化二（一八四五）年の『木曽川通国役普請絵図』です。同図は、米野村が描いた『水害破損絵図』を参照して、堤方役所が国役普請による猿尾、沈枠、杭出などの修繕ヵ所を描いたものであり、張紙には、手斧猿尾の沈枠一組の修築計画が記されています。なお、同図の曲線形の猿尾形状は、米野村の『水害破損絵図』ではL字型に描いてあり、両図共に猿尾の寸法などは不明です。

図－2は、堤防締役による治河御改正取調結果の明治四（一八七一）年の絵図であり、猿尾の形状や寸法などは信頼できます。同図の手斧猿尾は、長六五間（一一八m、高二間　頭巾二間　鋪六間）と長六五間（高四尺　頭巾九尺　鋪二間）から構成されています。

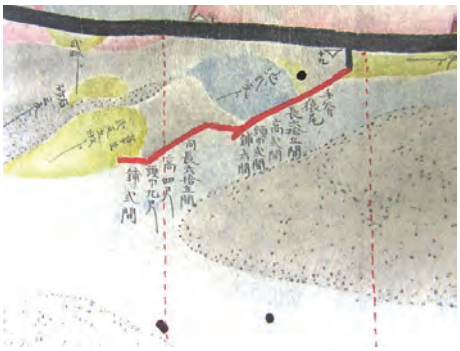


図-2　1871(明治4)年の手斧猿尾(『木曽川附各務郡前渡より羽栗郡中野村迄高反別并諸事書上帳』、岐阜歴史資料館蔵)

図－2の手斧猿尾の形状は、堤防から延びるL字型の猿尾先端に、長さが同じで幅や高さなどが小さい猿尾を継ぎ足したようであり、二十六年前の図－1の国役普請時の形状と大きく異なっています。

図－3は、大正改修工事が着工される直前の大正一一（一九二二）年頃に製作されたと推測される『木曽川河川台帳第５号』の手斧猿尾等で、この時代には右岸側に木曽川は流れていました。同図では、猿尾長は五十年前の長さ（一三〇間＝約二三七m）の半分以下（図より換算して約九〇m）の短い直線形に改築され、手斧猿尾根元部分から上流側へも猿尾が設置されています。つまり、猿尾は時代に即した形状と長さにたびたび修築・改築がなされている、と考えられます。

すなわち、上述の手斧猿尾の例

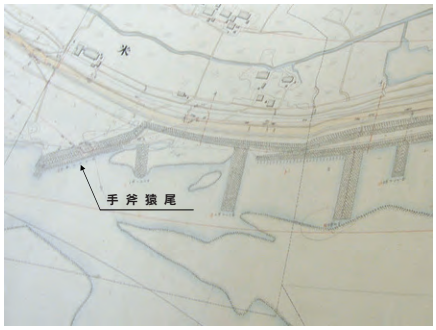


図-3　大正11(1922)年頃の手斧猿尾(『木曽川河川台帳第5号』、木曽川文庫蔵)

のように、拾町野の杭出猿尾も相当にその長さや形状が時代とともに変化している可能性がある、と考えられます。

二、測量調査

図－4は、平成二四（二〇一二）年九月に調査を行った稲沢市祖父江町拾町野猿尾北の川中に残存する杭出猿尾の位置図です。

杭出猿尾の形状や構造などを知るには、周囲を掘削して杭出猿尾基底部の構造、基底部の幅や基底部からの高さなどを測る必要があります。しかし、川中での杭出猿尾周辺の掘削は困難であり、猿尾が現れている現河床から上部を対象とし現地調査を実施しました。

測量は、猿尾に沿って縦断方向にほぼ五～一〇m間隔に横断測線を決め、横断測線上で高低変化の著しい所を最大一〇点ほど選んで計測しました。なお、杭出猿尾のほぼ中央部は破損しており、この破損部を境に、先端部（河道側）と根元部（河岸側）の形状を重点的に調査しました。

現地には、大小さまざまな杭が根本付近と先端部付近で密に打たれていましたが、太い杭だけに着目し、太い杭に目印の棒を立て、杭の高さは計測せずに杭の位置を確定しました。

（一）平面形状

図－5は猿尾の平面形状と杭の位置（赤印）です。全長は一五〇m程で、岸から三二m程の区間の横断幅は一〇m程であり、それ以外の幅は一四mから二〇mでした。なお、岸から三二mの狭小な横断幅の区間が、どのような原因によるのか現時点で不明です。

杭は根元付近では不規則に打たれているようであり、また猿尾中央部の破損部から先端部付近では規則性が見られるようでしたが、杭間隔を確定するには至りませんでした。

なお、根元部から先端部までの比較的猿尾の高位部を通る直線を平面図の中央軸としました。

（二）横断形状

図－6は、猿尾の上下流法面が河床と交わる深さと猿尾中央軸の深さを猿尾に沿って図示したものです。

同図より、中央軸での深さは猿尾中央破損部の六八～八一m区間で深さが大きくなっています。この区間と猿尾先端（一五〇m地点）以外では、中央軸の深さは三〇cm程の一定であり、猿尾頂部にはあまり大きな攪乱が与えられていないようです。

上流側猿尾法面下端の深さは、岸から四五m区間で下流側猿尾法面下端の深さより浅く、破損部を含む四五mから九七m区間で、下

図-4　測量調査した杭出猿尾

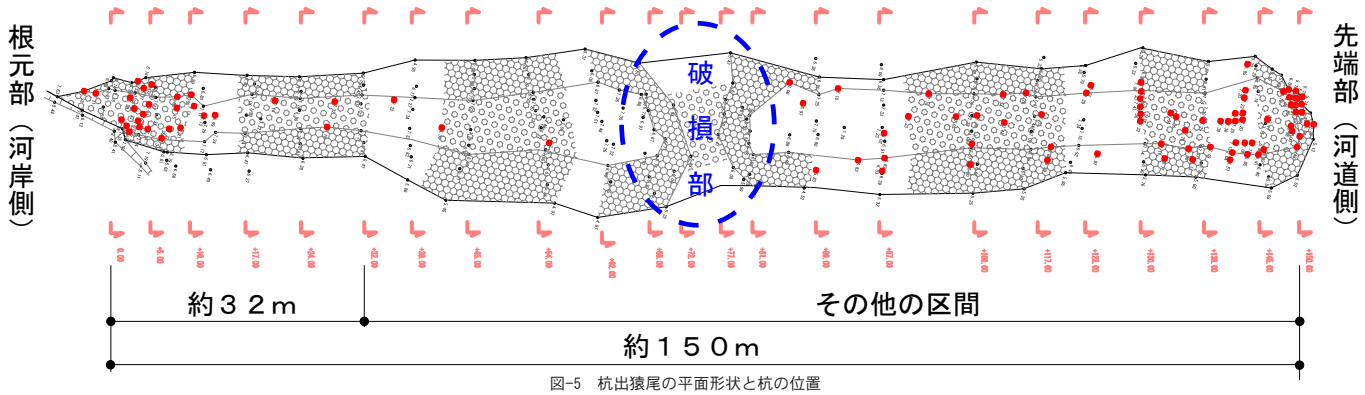


図-5　杭出猿尾の平面形状と杭の位置

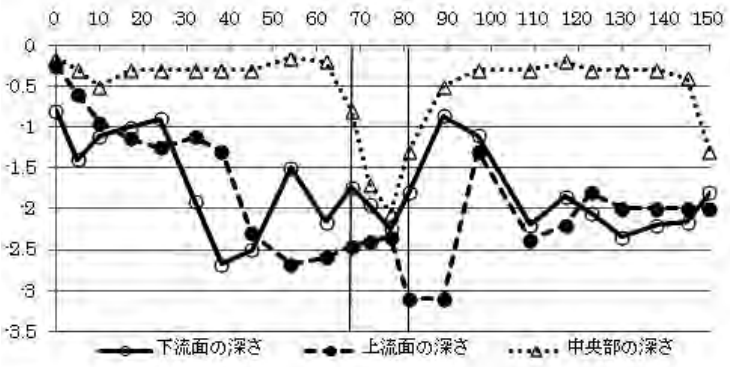


図-6　中央軸と上下流法面下端の深さ

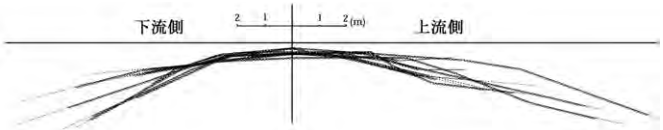


図-7　横断面5～62mまでの９断面を重ねた
（根本部～破損部）

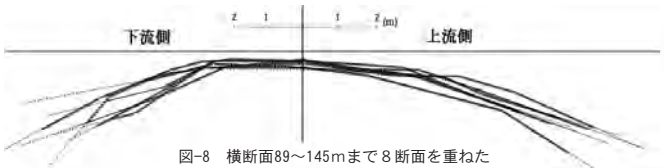


図-8　横断面89～145mまで８断面を重ねた

流側猿尾法面下端より深くなり、九七ｍから猿尾先端方向（九七ｍ～一四五ｍ）では、上下流猿尾法面下端の深さはほぼ同じでした。

この上下流猿尾法面下端部の深浅は、猿尾に沿って発生した相対的な浸食と堆積を現しています。つまり、破損部へ流れ込む流水が、上流側の河床を洗掘し、破損部から流れ出た浸食土砂が、岸近くの比較的流れの遅い区間で猿尾に沿って堆積している、と考えられます。一方、猿尾先端部付近では、馬飼頭首工による堰止めで流速が極めて遅く、ケレップ水制先端部で見られるような深掘れは発生していません。

（三）横断形状の考察

明治改修での佐屋川締切以降、杭出猿尾は放置され、人為的な破損以外に、出水によって各所が破損しているものと考えられます。

そこで、横断形状を考察するにあたって、各横断面を個々に詳細にみるのではなく、各横断面を重ね合わせて、その概略の包絡形状から横断形状を推測することとしました。

図－7は、距離五～六二ｍ（根元部～破損部直前）区間での九断面を重ねたものです。同図より、包絡形状は通常の猿尾形状に類似したほぼカマボコ形を呈しています。しかし、上下流猿尾法面の勾配は相当緩やかになっているようです。

図－8は、距離八九～一四五ｍ（破損部直後～先端部）区間の八断面を重ねたものです。同図より、下流側猿尾法面の勾配は図－7の法面勾配とほぼ同様の勾配ですが、猿尾頂部はわずかに上流側に傾き、さらに、上流側の猿尾法面勾配も図－7より若干急なように観察されます。この勾配に関する観察は、馬飼頭首工工事が始まる昭和四五（一九七〇）年以前の出水によって、根元部（図－7の形状部分）よりも先端部（図－8の形状部分）の覆石が上流側の河床部へ崩れ落ちたためではないか、と推測されます。

なお、杭出猿尾頂部の平均値的な幅を、図－7の頂部付近のほぼ水平部分から推測すると、約五・〇ｍ程でした。

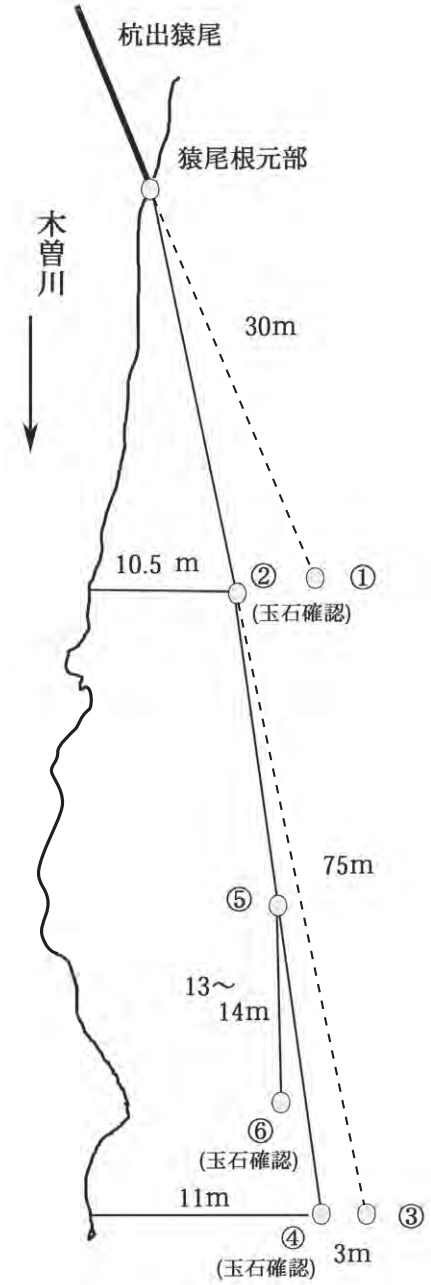


図-9　試掘位置図

三、埋没した杭出猿尾の試掘調査

写真-1　試掘状況写真

埋没した杭出猿尾の試掘調査を、改めて平成二四（二〇一二）年一一月一日に行いました。埋没している猿尾部分は、明治一九（一八八六）年四月のデ・レイケによる図面や一九七〇年代の航空写真によると、水没している猿尾の延長線上ではなく、やや西（木曽川寄り）に曲がっているものと推測されます。

試掘現場周辺は、野鳥保護のために樹木の伐採を行わず、川岸の樹木間を避けて樹木と芝生地の間の空地で試掘を行いました。

パワーショベルを用い、幅一～一・五ｍ、長さ七～八ｍで深さ一・二～一・四ｍ掘削し、玉石の出現を「猿尾の痕跡」としました。計六ヵ所の試掘の内、三ヵ所で玉石を確認しました（図－9）。

玉石が出現した三地点を通る平均的な直線を引くと、埋没している杭出猿尾は、根元基点部から約一三ｍ付近の地点で約二〇度折れ曲がっている、と推測されます。

今後は、陸上部に埋没している猿尾の一部でも掘削・保存し、木曽川祖父江緑地を訪れる人々に、先人の偉業が伝わることを願っています。

研究資料

奥の細道と式年遷宮

長島輪中の郷　館長

諸戸　靖

諸戸　靖

長島輪中の郷　館長
1956年（昭和31年）2月13日生まれ。
関西大学文学部史学科卒業後、三重県教職員。
平成2年から長島町（当時）の輪中の郷の建設に関わり、平成5年、輪中の郷完成とともに輪中の郷職員。
平成19年より現職（館長）
著書：三重県史（輪中に関して）、木曽川は語る（共著）。その他雑誌等での著作。
論文：昭和前期の木曽三川下流域（土木史学会）

奥の細道と長島

「奥の細道」とは元禄二（一六八九）年三月二七日江戸の深川を出立し、八月下旬に美濃の大垣まで旅をした俳諧紀行文です。

〈旅の目的〉

・西行の歌まくらの地をめぐり、東北や北陸の門人らとの交流を深めること

・伊勢の式年遷宮を参拝し、近畿を周遊すること

奥の細道の旅では河合曽良が随行しましたが、奥の細道の一節に、八月五日加賀の山代温泉で、

曽良は腹を病みて、伊勢の国長島といふ所にゆかりあれば、先立ちていくに

行き行きて
倒れ伏すとも
萩の原　　曽良

と書き置きたり

とあり、この「伊勢の国長島というところにゆかりあれば」とは、大智院のことであり、当時この寺の住職は曽良の叔父の良成のことといわれています。曽良と別れた芭蕉は、八月下旬に大垣に着き、九月六日には長島で静養していた曽良とともに再び、旅立ちました。

はまぐりの
ふたみの別れ
行く秋ぞ　　芭蕉

「奥の細道」の最後の句です。はまぐりは桑名を指し、ふたみははまぐりの蓋と身、伊勢の二見をかけています。

この間のことについては、曽良旅日記に詳しく書かれています。元禄二年八月の曽良の行動です。

十四日快晴関が原を立つ

（中略）

大垣に至る二里半程
如行を尋ね留守息止て
宿す夜に入り月見して
ありく竹戸出遭う清明
十五日曇辰の中尅
出船哈此筋千川
暗香への状残す翁へも残す

如行へ発句す竹戸脇す
未の尅雨降り出す申の下尅
大智院に着く院主西川の
神事にて留守（略）

関係部分だけを解釈すると八月五日に芭蕉と別れて山中温泉を出発した曽良は八月一四日には関が原を発っています。そして、「二里半程」と書かれているので、約一〇キロメートルを徒歩で大垣まで来ており、一泊しています。翌一五日の午前八時頃、「出船」と書かれていますので船で大垣を出立していますが、「此筋千川」と書かれているように、行く筋にも流れがあり、そこを下っていきました。その際には旅のことや芭蕉のことなどを暗香や如行にも書き残しています。しかし、朝から曇っていた天気も午後二時頃には雨が降り出し、現在の国道一号線の直ぐ北にある長島の大智院に入りました。ですので、大垣から長島までは、六時間ほどの船旅ということになります。

当時の船がどのくらいの大きさで、何人くらいが乗れたかという確かな資料は残っていませんが、当時

1750年頃の木曽三川の河口の絵図

長禅寺付近
（現在は移転してありませんが、当時は揖斐川に面していた）

の絵図から揖斐川筋は多量の土砂が堆積していたと思われ、大きな船が頻繁に通行できたとは考えにくい部分もあります。

八月一六日から長島で病気の療養も兼ねて曽良は静養していたと考えられます。その間の天気のみ記すと一六日快晴、一七日快晴、一八日雨、一九日から二二日まで晴れ、二三日快晴、二四日晴れ、二五日午後雨、二六日晴れ、二七日二八日雨、九月一日晴れ、というように秋特有の天気変化となっています。そして、九月二日も晴れでそのときのことについては次のとおりです。

九月二日晴大垣為
行今申の尅より長禅寺へ
行而宿海蔵寺に出会す
三日辰の尅立行養老へ
寄及夕大垣に着天気吉

関係部分を解釈すると、九月二日晴れ、午後三時ごろに大垣へ行くために大智院を発ち、同じ長島北端近くの杉江の長禅寺へいき、その近くにある海蔵寺で泊まっています。そして翌日、午前七時三〇分ごろ出立しています。その後、道中で養老へ寄り、夕方に大垣に到着しています。養老でどのような用件があったかはわかりませんが、上流に向かって進んでいるためか一〇時間近くを費やしています。

芭蕉と長島

大垣についてからの曽良の行動については次のとおりです。

四日天気吉五日
同六日同辰尅出船木因馳走
越人船場迄送る如行今一人
三り送る餞別有申の上尅杉
江へ着予長禅寺へ上て陸を
すぐに大智院へ到舟は弱時
程遅し七左由肝玄右来て翁に謁す

この部分についても関係部分を解釈すると四日・五日と天気は晴れで、六日午前七時三〇分頃大垣を出発します。その時弟子の木因が走ってきて、越人とともに見送っていますが、木因のみは廻船問屋を営んでいることもあり一二キロメートルほど同行して餞別を渡しています。船は揖斐川を下り、午後三時頃に長島の杉江の長禅寺についています。木因らとの分かれもあったとは考えられますが、約七時間三〇分程の船旅だったと考えられます。このときに詠んだ句が、前出の

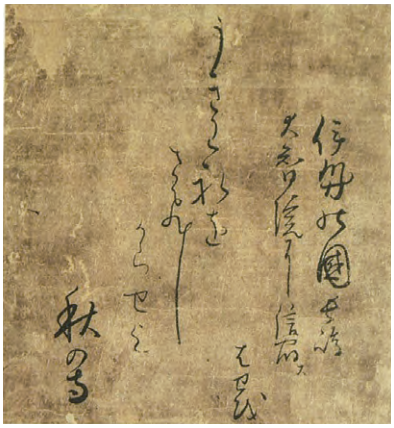
はまぐりの
ふたみの別れ
行く秋ぞ

になります。

その後、曽良は陸路で大智院へ向かっており、芭蕉一行を乗せた船は、曽良より少し遅れて大智院に到着しています。曽良が大智院で出迎えの準備をするために芭蕉一行がゆっくりと船を走らせたかどうかは定かではありませんが、現在でも杉江から大智院まで一時間近くかかることから、当時の道の状況や小水路が無数に輪中の中を巡っていたことを考えて、当時の人では一時間以上かかっていたと思われます。つまり芭蕉一行が旧暦の九月六日大智院へ到着したのは、午後四時以降ということになります。ちょうどこの時間帯は夕日が鈴鹿の山に沈む時間帯で、晴天の夕日が山に沈む頃には空も川も真っ赤に染まっていたと想像されます。そこで芭蕉が大智院に入るときに読んだ挨拶句が、

うきわれを
さびしがらせよ
秋の寺

という句になり、現在も実物が大智院に残されています。



さて、ここからは想像になるため事実と異なることがあるかもしれませんが、元禄二年という年が二〇年に一度の式年遷宮の年であったということ、また、青年時代を長島で過ごした曽良は裏木曽から切り出された式年遷宮用の木材が、自宅のようにして過ごした大智院の前の揖斐川を通って、桑名港に入る姿を見ていたことと思います。芭蕉も青年期まで過ごした伊賀で、前回の式年遷宮を見ていたことは想像に難くありません。当時の人々にとっての伊勢神宮、それも式年遷宮は、今以上に身近なものであり、体験したいものであったはずです。このため冒頭に書いたように芭蕉が、元禄二年に奥の細道のたびに出たのは、偶然ではなくこの式年遷宮を参拝するためでもあったということは間違いないと思います。まして、三月二七日に江戸深川を出立したということは、暖かくなった頃に東北を廻り、その年の秋の式年遷宮に合わせた日程を組んだのが、門弟の中でも地理学や天文学に最も詳しい曽良であり、同行した理由の大きな一因であったと考えられます。

では、長島の大智院では、どのように過ごしたのでしょうか。挨拶句に「信宿」と書かれています。これは俳諧では二泊三日のことで、到着したときには芭蕉一行は、九月六日から八日までの滞在を予定していた

長島大智院
（当時は揖斐川に面していたため、大垣から直接舟で接岸できた）

ようです。実際に曽良旅日記の中でも次のように書かれています。

七日七左八良左正焉等入来帰て
七左残り俳有新内も入来
今宵翁八良左へ被行今晝
川澄氏へ遭請事有寺へ帰て
金三歩被越木因来る
八日雨降る故発足延引俳
有とも病気発して平臥す

九月七日は長島の芭蕉の弟子が集まり、句会を行っており、その日も大智院で宿泊しています。そして、九月八日になり出発するときに雨が降っていたため、船が出ず、出発を延ばしています。但しこの日、曽良は再び体調を崩し一日臥していました。翌日は

九日快晴出船辰の尅桑名へ上がる
一里余暗く津に着

長島から伊勢へ

九月九日は快晴になり、曽良の体調も回復したと見え、午前七時頃には長島を出立し、三〇分後くらいには桑名に上陸しています。前出の古図でもわかるように長島と桑名の間には通称桑名川と呼ばれる現在の揖斐川が流れており、長島の対岸が直ぐに桑名でした。しかし、当初の予定よりも雨のため一日遅れているために、目的に津の四キロメートルほど手前で暗くなっています。つまり長島から津までの五〇キロメートル以上もの距離を一〇時間ほどかけて歩きました。翌日からは、

十日久居長禅寺へ行て宿
快晴　十一日長禅寺辰上尅
立堤ぜこ到て雨降る則宿
十二日辰の尅館の長左へ尋て島崎
味右衛門西河原の宿へ移る十三日
内宮参宮未の尅帰て遷宮
（中略）
十四日外宮へ
詣此日猶神宝を移す岩戸
月夜見の森へ詣帰る及申
悪寒有

一〇日津から久居の長禅寺にまで、ほんの数キロだけを歩いてそこに泊まっています。前日の疲れや体調が不良であったかもしれません。一一日は午前七時頃に出発したにもかかわらず、雨が降ってきたので、宿をとり、翌一二日に伊勢に着いたようです。そして、一三日に内宮の遷宮を参拝し、一四日には外宮の遷宮を参拝し、午後三時頃には悪寒を感じて、休んでいるようです。曽良旅日記からは遷宮の様子が淡々と書かれており、芭蕉の弟子達と数多く出会ったことや遷宮の中でも神宝を移すことなどが記されています。ただし、一三日の内宮の遷宮においては法体（僧侶のようないでたち）であったために間近で神宝を見ることができなかったため、翌日の外宮の遷宮では着替えて間近で神宝を見ることができたといわれています。

十五日卯の尅味右衛門
宅を立翁路通中ノ郷迄
被送高野一栄道にて逢
（中略）
至津に宿す　申に下る
十六日寅の上尅立上野至
未明稲生へかかり神戸至
町屋川過て雨振
大智院へ寄水風呂に入り
夕食

一五日は午前五時ごろには伊勢を出発し、芭蕉と路通を中の郷まで送り、曽良は午後三時頃には津まで歩いています。翌日は伊勢街道を北上し、上野（現在の津市）、稲生（現在の鈴鹿市）、神戸（現在の鈴鹿市）を通って現在の桑名市と朝日町の境の町屋川に至っています。ここで再び雨が降りだしましたが、桑名を通って、揖斐川を渡り、大智院で夕食をとり、宿泊しています。なお、芭蕉一行は曽良と分かれた後に近畿周遊の旅を行っています。

その後の長島

芭蕉は奥の細道、式年遷宮の旅の後、二回ほど長島には来訪しています。元禄七年の旅では、再び大智院で宿泊していますが、その年に大阪でなくなっています。芭蕉が長島に来訪した時代、長島藩は松平氏が治めており、家老の藤田八郎左衛門はじめたくさんの芭蕉の門人がいましたが、元禄一四年には、故あって改易され、その後増山氏に代わっています。芭蕉の来訪の一〇〇年後、当時の長島藩主増山正賢（雪斎）公は、記念の石碑を建立し、家臣らにより詩会を催しています。

河合曽良

通称：岩波庄右衛門。後に河合惣五郎と名乗りました。信濃の上諏訪に生まれ、大智院住職の叔父：良成を頼って長島に来たといわれています。長島では青年期を長島藩に仕え、その間に天文学や地理学・神道などを学んだといわれています。その後江戸へ出て国学を学び、芭蕉との住まいが近かったこともあり、弟子になりました。

曽良の名前は木曽川の曽と長良川の良からとったという説もあります。芭蕉の旅にはよく随行しており、優れた句も多く残しています。後年は幕府の巡見使（随行員）となり、全国を廻っていますが、宝永七年壱岐の島でなくなりました。六二歳といわれています。

男岩・女岩（大桑村須原）

昔むかし、須原村の松渕沢には、青く澄んだ水を湛えた渕があって、たくさんの魚がすんでいました。

渕の近くに「倉」という名前の漁師が住んでいて、もっぱら渕で魚をとってなりわいとしていました。いつもの様に、倉が漁をしていると、山の方から何者かが大声で「倉やるぞ倉やるぞ」と呼ぶのが聞こえました。倉は不思議に思いながらも「オオよこさばよこせ」と返事をしてしまいました。

すると山の頂に黒雲が現れ、にわかに辺りは真っ暗になって、雷をともなう激しい雨が降りだしました。驚いた倉は慌てて家に逃げ帰りましたが、雨はますます強くなり一晩中止むことが無く、夜半には地鳴りさえ起こりました。

生きた心地のしない一夜を明かした倉が外に出て見ると、美しかった渕は埋まって石川原となり、下流の田畑にも土石が流れ込んで一面を覆っていました。その中に一際大きな岩が２つ立っており、その姿はとても怪異なものでした。村人はこれの上方を男岩、下方を女岩と呼ぶようになり、倉があまりに殺生したので水神様の祟りにあったという話とともに語りついできました。

この男岩・女岩は『信濃名所図会』にも載っていましたが、明治になって鉄道工事の石材としてきり出されたそうです。

木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平閘門
木曽川文庫

《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分

《休 館 日》
毎週月・火曜日（月・火曜日が祝祭日の時は翌日）・年末年始

《入 館 料》無料

《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

KISSOホームページ
http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html

木曽川文庫へのお問い合わせは
〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

編集後記

歴史記録は、「宝暦の河川施設」を２回に渡り連載しました。

次号は、「高木家文書にみる宝暦治水」を掲載します。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSO ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「水舟」
須原宿（木曽郡大桑村）は古くから清水が湧く宿場として知られており、今も丸太を繰り抜いた水舟が見られます。水舟には清らかな水が流れ込んでいて、飲み水や時には野菜・果物を冷やすために利用されていました。

下
「阿寺渓谷」
野尻駅から西に1.5ｋｍほど山間を分け入ると澄み切った水が巨岩の間を流れる美しい景観が現れます。大小の滝や渕が四季折々に様々な表情を見せ、年間を通して多くの観光客が訪れます。

『KISSO』 Vol.88 平成25年10月発行

編 集 木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発 行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002 三重県桑名市大字福島465
TEL（0594）24-5715 ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/